



Saitama Rugby School Magazine

2015年2月号

Head Line

- ★仙台ラグビースクールとの交流会 浦和RS
- ★リコーブラックラムズ森谷さんの活躍
- ★スクール指導のヒント

2015年2月13日 No.46

発行責任者 鈴木正則

編集 スクール部会広報

仙台ラグビースクールとの交流会

2月1日開催 浦和ラグビースクール



浦和ラグビースクールでは2月1日(日)、さいたま市浦和区の大原スポーツ広場で、仙台ラグビースクールとの交流会を開催しました。

県内の川越ラグビースクール、ケヤキッズ大宮ラグビーフットボールクラブをお招きし、4スクールの各学年単位で合同練習とゲームを行いました。快晴でしたが、強風と水田のようなグラウンドコンディションの中、子供たちは泥んこになりながらも熱いプレーを見せてくれました。

恒例となった仙台ラグビースクールとの交流会ですが、例年ならば亘理ラグビークラブ

も一緒に遠征なのですが、震災の影響からスクール生の減少が続き、残念ながら今回の参加は実現しませんでした。来年は、お待ちしております。

浦和RS 山野英彦



リコーブラックラムズ 森谷和博さん 広報・普及担当として活躍

リコーブラックラムズの応援席やチームテントでレジェンドと称される田沼広之氏と行動を共にしている好漢。広報・普及担当の森谷和博氏。



勇猛果敢なボールハンターとしてFL、No.8として活躍も怪我のため昨年(2014年)3月、惜しまれつつ引退。経歴をさかのぼると上柴中でラグビーを始め、高校は県内の強豪校である正智深谷高校に進学。第83回、第84回全国高校ラグビーでは準決勝進出と好成績を収める。

拓殖大学時代は社会人でも共にプレーした横山兄弟（現日本 IBM）らと共に大学ラグビー界に拓殖旋風を巻き起こした。リコーブラックラムズでプレーしていた時にはトップリーグセブンズの優勝に貢献。また、埼玉県トップリーグ選抜チームの一員としてプレーするなど埼玉県内での活躍もめざましい。

引退後は広報・普及担当として活躍の場を移し、ラグビースクールに足を運びラグビーの普及活動を行い、試合となるとカメラマン、応援団、グッズ販売員など裏方としてチームを支えている。

ファンへのメッセージを伺った所、『弟をよろしく』との事。次男の直貴選手はルーキーながらもキヤノンで常時試合に出るようになり、三男の圭介選手は大学選手権六連覇を達成した帝京大学の中心選手。残念ながら公式戦で三人が揃って試合に出る事はないが、普及で足を運んだ生徒が1人また1人と森谷三兄弟のようにラグビーを続けてもらいたいと思う。



埼玉県選抜のチームメイト 正智深谷高出身
左から森谷和博さん、野口裕也さん、朝見力弥さん

好評連載中

.....スクール指導のヒント

本来のスポーツは、その語源からしても「気晴らし」「遊び」であり「自ら楽しむこと」に意義があります。日本の「スポーツ」は、これまでに学校の体育授業や部活動の場を通じて普及して来た経緯もあり、「スポーツ＝体育＝運動」というイメージで認識されているケースが多々あります。学校の枠組み

では、教師と生徒の関係からして、教育的な見地からの根性主義や精神論、スパルタ的な厳しい練習・指導といったものも受容されやすい環境にあります。

◇スポーツにおける体罰、暴力問題

【部員に体罰で辞任】

花園常連の高校ラグビー部監督が部員に体罰を行ったとして1月末に辞任した。年末の全国大会開幕前日練習で3年生部員を押すなど暴力行為を行った。部員にけがはなかったが、匿名通報があり学校側が確認。同監督に体罰の認識はなかったが、事実を認めて辞任を申し出た。同監督は2010、11年度に高校日本代表監督を務めていたが、2013年3月に体罰を理由に学校側が謹慎処分するという異例の事態も起こしていた。内部からは「ラグビーの名門ということで、これまでは黙認されてきた。」「問題視する声はあったが、自校の名を上げてくれるスポーツ指導者ということで大目に見るという感じでした。」…(記事より抜粋)

この記事の内容は、皆さんもご存知だと思います。体罰・暴力の是非は言うまでもないことです。ラグビースクールにおいても他山の石として指導者・保護者・生徒が一体となって意識の差をなくして「体罰・暴力の根絶」につとめなければなりません。

今回の事件で問題にしたいのは、教師の個人の問題ではなく、組織体制としての以下のポイントです。

- ① 教師による暴力が以前より恒常化していた。
- ② 教師への牽制機能が働かなかった。
- ③ 学校が情報をディスクロズしなかった。
- ④ 内部告発が出来ない環境であった。
- ⑤ 教師自身を指導する体制・チェック機能。

昨年県内のスクール練習中に体罰に近い光景があったとの話を聞き愕然としました。スクール内でこのテーマについて考えてみてください。

他のスクール指導者とも連携しながら、客観的に相談できる窓口を設置する等の新たな仕組みづくりや指導者の意識向上を促す施策も必要なのではないでしょうか。

親から体罰を受けた子供はさらにその子供への体罰を連鎖させるとの指摘があります。指導内容の善し悪しは別にして、指導者も自分が過去に受けた指導の影響を受けやすいのではないのでしょうか。特に目先の勝敗や成績への強いこだわりを持つ熱心な指導者ほど、オーバーユースや体罰を無意識のうちに正当化してしまう恐れがあります。

子供の未来責任を担うスポーツ指導者は、スポーツだけではなく中長期視点での人間性や社会性の成長も視点に入れてゴール目標を持ち、自ら

のスポーツ指導に求められているものを考える必要があると思います。体罰問題は、スポーツの社会的な評価を引き下げの一因にもなっているように感じます。

英国のエリートスクールでラグビー等が取り入れられるようになったのは、フェアプレイの精神やセルフコントロールが求められるからだと思います。ピッチにコーチは入れません。社会と同様に自ら判断し、決断する力が必要になります。

つまり、スポーツ指導の現場では『自分で考え判断する』ことを学べる機会をつくるのが重要なのだと思います。『体罰に頼って作り出される人間は体罰によってしか動かない。そんな人間を社会は必要としていない。』ことを指導者は肝に銘じたい。

公認クラブマネージャー
ラグビーフットボール指導員
ふくじゅ草 井尻靖彦

Present

■応募方法

埼玉県ラグビーフットボール協会のお問い合わせメール (info@rugby-saitama.jp) で申込む
subject「サイン入り色紙」希望と記載

本文に①氏名②送付先住所③年齢を記載④希望の番号
当選発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。

① 帝京大学
流 大主将



② キヤノンイーグルス
菊谷 崇選手

